

戸畑の教覚寺で布教しているとき、またたきもせず睨みつけて聞いているのが田中さんであった。二日目には、泣き泣き家に帰るので同行がついて行くと、仏壇の前で胸をかきむしりながら泣いている。「泣きなさんな、なぜ泣くのか」と尋ねたら「これが泣かずにおれるものか。永年かかって聞かしていただき、りっぱにできあがっていた信仰がめっちゃめっちゃに崩れてしまったではないか」「いいじゃないか、仏さまが救うてくださるのではないか」「それが当てがはずれたのではないか、助かるたすかるとこちらが決めていただけで、仏さまと離れたではないか」「布教使が言ったくらいで心配することはいらぬ。十劫の昔から助けると立っておいでになるではないか」「それは話ではないか。布教使が一日か二日説教しただけで、何十年も聞かされた信仰が崩れるとは本物でない証拠ではないか。日本の無敵艦隊も相手がないから無敵艦隊だったので、今まで法のお手元ばかり語る布教使だからよい気になって法に調子を合わせて喜んでいたが、機を突く人が出てきたら一瞬に撃滅されたではないか。素直に聞けというのは猫を冠っているだけで、三世の諸仏に捨てられたといわれても、第十八願から除くと言われても素直に聞いていると自惚れているのだから、脈の上った屍で、宗教を聞く圏外にいるのだから、信仰と無関係の位置にいるのだから、話を聞いているだけだから、易いのだ。今までは一大事でも何でも無い、法の話を知っているだけで、機受の信相といつて自分が受け取った味は一寸もなかったのだ。何を今まで聞いていたのだろう。阿片で酔っていただけだ。こんな大きな陥穴があるとは知らなんだ。この真実の機が知らされなければ第十八願の絶対他力の救済にはならないではないか。いくら法のお手元が大丈夫でも、私の機の手元が大丈夫にならなければ深心とはいえないではないか。親の金剛心が子の金剛心になる。

真心徹到するひとは

金剛心なりければ

三品の懺悔するひとと

ひとしと宗師はのべたもう

五濁悪世のわれらこそ

金剛の信心ばかりにて

ながく生死をすてはてて

自然の浄土にいたるなれ

金剛堅固の信心の

さだまるときをまちえてぞ

弥陀の心光撰護して

ながく生死をへだてける

本当に仏智が満入したのなら、天地はひっくりかえっても狂いのないのが金剛心ではないか。人の舌一枚で崩れるような信仰なら贗物ではないか、それを後生大事に死んだらお助けおたすけと握っていたことが悔しい」と泣きじゃくつてるとき、主人が工場から帰ってきた。「なんじやい信仰が崩れたと泣いているのかい、何十年参って何を聞いていたのだ、俺たちは一度聞けばすぐにわかる、その身そのままその機のなりを救うというのだから、はいと素直に受けたらよいではないか」「お父さん（主人）、そのくらいのことには誰でも知っている」「知っておればそれでよいではないか」「話を知っているのは助かったのではない、それは話ですよ」「話でよいではないか、仏さまは絶対に嘘を仰らないのだから」「それが自性を抜きにして感情が聞いているのだから、感情は直ぐに消えると先生は言われたが、その通り今まで喜びよった感情が消えて、知らん顔した機が出てきたから信仰がなくなったのですよ」「おまえは妙なことをいうなあ、心が二つも三つもあるか」「それが二つあるのです。上の心は猿で、ご教化に調子を合わせている感情、下の心は牛で、梃子でも動かない自性なのです。私の感情が仏さまに調子を合わせているのは合点だから易いのですが、仏さまは私の自性と一体になろうとなさるのですが、私の心が知らん顔しているから難しいのです。今までのありがたい感情が消えて、動かない自性が見えてきたのですから生命がけで求めさせていただきます。必ず広い天地があると先生がいわれました。聖人もその動かない心に泣かれて、泣き泣き法然上人に逢われて曠劫多生のあいだにも

出離の強縁しらざりき



ができたので、第二十願は法は他力でも、機を見るなど包むところに機が自力であり、第十八願は法を見てよし機を見てよしのところに法が他力で機が他力の不思議の世界があるのである。

田中さん、すかされても騙されても、この道よりほかに、あなたの救われる道はありません。私も永い間法を眺めて合点して喜んでいたことに気がつき、機が見えだしたら信仰は総崩れ、今までは他人の信仰、聖人さまのご苦勞や、妙好人の話を聞いて自分の信仰と思っていたのですが、自分の実機はどうもなっていないのに驚き、必死の求道をさしていたとき、思慮も分別もすべてがつきて、無条件で攝取された大慶喜があったから、小我を捨てて宇宙の大我に生きれば、善悪を超越した無我の境地があり、神通自在無碍自在の、言葉を離れた不思議の仏智を体験さしていただいた世界があるから、聞即信の一念で凡人一体になって下さい。一即一切で聖人様がなれたから、私になれたのです。私になれたから、あなたもなれるのです。宗教は形のないものですから言葉でなければ導かれませんが、言葉を離れなければ不思議の仏智は諦得できないのです」

田中さんいわく、「今まであれだけ喜んでいたのに、今はさっぱりわからなくなりましたが、あの喜びはどこに逃げたのですか」「それはお言葉ありがとうございますがたかったので、自分が救われてありがたいのではなかったのです。他人の信仰を借りて真似をして喜んでいたので、借りものは返さなければならぬのです。今からは、受取ったか、晴れたか、満足したか、と実地に突くと何ともないでしょう。お説教の上で、頂いた信が誠なら、本願が届いたら、死んだらお救いと、なら、たら、だと希望、期待、死後の夢を見て、観念の遊戯をしていたのですから決心にならないのです。臚綱を解かずには櫓を漕いでいたのですから向こうの島は見えず、舟は動いていても目的地に到達することができないのです。自分の機を見ることを忘れて、空の法ばかり眺めて喜んでいたので、機を掘れば掘るほど、突けば突くほど知らん顔しているのがあなたの実機です、それが動かないから三世の諸仏が愛想をつかしたのです。阿弥陀様に縋ろうとすれば、唯除五逆誹謗正法と捨てられていると聞かされてみれば、大海原の捨小舟となったのです。八方塞がり絶体絶命、助かる縁がないと往生の望みの綱が切れたときが、

あなたの実機がはつきり照らし出されたので、いつれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住家ぞかし、欲が青鬼になり、怒りが赤鬼になる原因としたら鬼が鬼になるのが元もとでございましてと投げ出したのが捨自で、あなたが零になるまでが調熟の光明の作用、この境地まで指導してくださるのが第二十願の果遂の誓いの願功です。絶対の悪が照らし出されたときと絶対の仏智とが一体になったときに第十八願の撰取の光明に撰取されたときで、これを和讃に

金剛堅固の信心の　　さだまるときをまちえてぞ

弥陀の心光撰護して　　ながく生死をへだてける　　とおっしゃったのです」

「私は信仰を求め柄でありませんでした。墮ちるも上がるも何にもわからない。私の身体から火を噴いているのでございます。何のためにこんなに苦しまねばならないのですか、十劫已来立ちづめといいながら、八千遍のご苦労といいながら、恒沙の諸仏の証明といいながら、私一人をどうすることもできないとは、仏さまの慈悲がどこにあるのですかと逆ねじを掛けた強硬難化のわたしが、往生の望みの絶えたときと撰取されたときは同時であって、天に踊り地に踊り、これが無条件でございませうか、これが唯でございませうかと涙も鼻水も一緒に顔はぐじゃぐじゃになり、ただ南無阿弥陀仏なむあみだぶつとお称名は滝のように溢るるばかりでありました。ああまで苦しまなければ、自力の機執は捨たらなかつたのでございますか、もう一度あの苦しさを経験してみようと、いくら機を見ても噴き出る喜びの称名よりありませんでした。見るもの聞くものすべてが仏さまのお計らいで、わたし一人をこの境地に引出すためのお計らいであったのかと身体全体が融けるように嬉しうございました。あの苦しみ、あの不安、あの悩み、あの行き詰りが微塵もなく、喜びに満ちて晴ればれた毎日の生活を、見ている主人が驚いて「おまえの喜ぶ姿を見ておれば俺の信仰は贗物に違いない。一寸も喜ばれない」「念には念を入れましょうや、遠方まで出て聞きましたようや」「うん、夏中の本堂の布教が終わったらどこに行かれるか問うて来い」と言いますので、時と処を教えてください」鳥取と津山と書いてあげたら津山で夫婦で参詣してきた。「この近所がお里ですか」「いや宮島の近所です。主人も家を

離れて真剣に聞きたいと申しますので、先生の後を追うてきました」住職と相談して、法然上人の誕生寺にバスで参詣することになった。婦人がきて「主人が『煩悶しているから見物にはゆかない』と申しますが、主人がゆかねば、私もゆかれませんかから勧めてくださいませんか」というので、「ご主人、遊覧ではありませんよ。聖跡巡拝といって法然上人にお逢いにゆくのですよ、参りませんか」「それなら参りましょう」宝物館の入口から出るまで奥さんが泣いているので「なぜないたのですか」と尋ねると、「入口のところに法然上人さまのお母様のお召物があつたので、あの着物に包まれていたお母さんのお胎から上人様が産まれられ、浄土門をお開きになり、それによって親鸞聖人様が救われ、それによって先生が救われ、それによって私が救われて、今の大満足を得させていただいたのはあのお召物の中からと思えば、流れを汲んで本源に還つて泣かずにはおれなかつたのです」

### 【八万の法蔵は聞の一字に撰まる】 327頁

戸畑の女同行が、「自分は広島生まれで、若い時から真宗のお育てを蒙っている。異安心の評判の高い大沼さんの説教を一度聞いてみよう、と思つて聴聞したところ、三十年もかかつて法のありがたいお言葉で固めていた信仰は、三日目には崩れた」と言つておりましたが、何十年もかかつて築きあげてきた東京の文化も、関東の震災で一瞬に崩壊した。法のありがたい話は観念の遊戯です。受取つたか、晴れたか、満足できたかと腹を突かれると、一度で崩れてしまうのです。だから真宗では、機を見るな、十劫の昔に助かつていることを知らなんだのだと、十劫秘事の異安心になつていゝのです。出てゆくのは自分の機ですよ、晴れたか届いたか、満足できたかと、自分の心に確かめるのが、なぜ悪いのです。廻向するぞ、廻向するぞ、といわ

### 五濁悪世の有情の

選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の

功德は行者の身にみたり

不可称不可説不可思議の功德とは、数限りもなき大功德のことなりと説明してありますが、どんな功德をもらっているのですか、空手形で踊らされているだけではありませんか。選択本願信ずればですよ、信じましたか、感情が合点しているのは自力の浅心ですよ、あなたの秘密の部屋にどんなな化け物が隠れているか、ご承知ですか。それが照らし出されることが難中の難ですよ、それが開發さされるのが極難の信ですよ、他力廻向の信心の徹底したのを、選択本願信ずればといわれたのですよ。この他力不思議の信仰が徹底すれば、深心すれば不可称不可説不可思議の功德が身に溢れて、見るもの聞くものがみな喜びに変わります。

変わらないで不足や愚痴しか出ないのは、信仰が贗物、誤魔化し、真似、本物でないから、功德どころか、苦毒は行者の身に満ちて、称名念仏しながら悪事災難が連続して顕れて、自分を苦しめているのです。

あなたの聞き方が方向を誤っているというよりは、教えている方が徹底していないのです。